

# 落花生の品種の特性と其の分類に就て

紙 屋 貢・渡 邊 昌 幸

農林省鹿兒島農事改良實驗所

落花生は良質の脂肪及び蛋白質を多量に含有し油料作物として重要であるのみならず、畑作經營上極めて有利な作物である。即ち豇科作物であるので肥料を要せず莖葉は綠肥又は飼料として有効であり、子實が地下に結實するので各種の災害に對する抵抗性が大で栽培が容易である。然るに一面在圃日数が長きに過ぎ輪栽の上から大なる制肘を受け、又場所に依つては空莢歩合が大であつたりして、畑作經營の中に組織的に織込めない場合がある。著者等は之れが品種の特性を明かにする事に依つて畑作經營への導入の資を得んとした。今、其の成績の一部を發表する事にした。

今迄落花生は草型、粒の大小、熟期の早晚等に依つて分類されて來たが栽培上は草型による分類が適當と思はれる。草型の如何は栽植密度を左右し落花生の如き1個體の占有する面積の大なる作物は、栽培密度が収量に大なる影響を與るからである。従來草型に依つては直立型、匍匐型に2大別されていたが、竹馬氏や岡宮氏も言つている様に3群に分ける事が妥當と思ふ。即ち

A群—主稈長は中、分枝長は最短、分枝數は中で従來直立型と稱せられたもの。

B群—主稈長は最長、分枝長は中、分枝數最も少なく従來直立型に入れられ又は中間型とされていたもの。

C群—主稈長が最短、分枝長最長で分枝數最も多く従來匍匐型と稱せられていたもの。

の3群である。昭和22年及び昭和23年供試した品種を上記の3群に分け、他の形態的特性及び病虫害に對する抵抗性を示すと次表のようである。

次表によると黒澁病に對する耐病性には品種間及び群間の差異が認められる。尙B群がこがねむしの喰害をうけたのは小林氏が大豆に於て指摘した如く、主稈長が長く地上からの高さが最も高く又その葉質によるものと思はれる。以上の3群を他の形質に就て比較すると次の通りである。

品種番號	品 種 名	取寄先	草 型	葉 の 大 小	葉 色	莖 基 部 の 色	毛 多 少	黒 澁 病	こ が ね む し
1	立 落 花 生	鹿 屋	A	中	濃	赤	少	中	一
2	立ラクダB3號	〃	〃	〃	〃	淡	〃	少	一
3	立ラクダ9號	〃	〃	〃	〃	〃	〃	中	一
4	立ラクダ8號	〃	〃	〃	〃	淡	〃	少	一
5	種子島立在來	種子島	〃	〃	〃	〃	〃	一	二
6	白 油 種	鹿 屋	B	大	淡	淡	〃	多	十
7	ス ベ イ ン	二 宮	〃	〃	〃	〃	〃	〃	十
8	ジ ャ	〃	〃	〃	〃	淡	〃	〃	十
9	ラバール在來	羽犬塚	〃	〃	〃	一	多	〃	十
10	バ ー ジ ニ ア	二 宮	〃	〃	〃	〃	少	〃	十
11	黃 粒 立 基	千 葉	〃	〃	〃	淡	〃	〃	十
12	茨 城 立 中 粒	〃	〃	〃	〃	〃	少	中	多
13	支 那 落 花 生	鹿 屋	C	小	濃	淡	少	中	一
14	種子島在來	〃	〃	〃	〃	淡	〃	〃	一
15	德 島 在 來	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	一
16	千葉中粒43號	〃	〃	〃	〃	〃	中	〃	一
17	千葉中粒45號	〃	〃	〃	〃	〃	中	〃	一
18	千葉中粒55號	〃	〃	〃	〃	〃	中	〃	一

## 〔I〕 熟 期

熟期が早く在圃日数が短いと言ふ事は經營上最も大事な點であるが、性質上熟期の判定は困難で比較ににくいが大體開花期と一致するのでそれを示すと次の通りである。

群別	開 花 期
A	6.28—30日
B	6.12—16日
C	6.24—28日

即ちB群が最も早くC群之れにつきA群が最も晚い。概してB群は早生でC群及びA群は晩熟である。

## 〔II〕 結 實

澁谷氏が示した如く開花數に對して子房柄の伸長するものはその一部であつて、地下に侵入結實するもの

は又その一部である、本調査に於ては開花数の調査を缺ぐのであるが、子房柄の伸長、結實の様相には相當の差がある。

品種番號	完全莢數		腐敗莢數		未熟莢數		子房柄數		合計
	實數	%	實數	%	實數	%	實數	%	
1	41.0	28	3.2	2	25.5	17	76.1	52	145.8
2	29.7	16	8.1	4	38.3	21	108.8	59	184.4
3	34.5	20	8.1	5	42.0	24	89.4	51	174.0
4	69.2	29	5.7	2	52.8	22	109.1	46	237.0
5	54.7	28	2.2	2	54.6	28	84.3	43	195.8
6	61.0	30	1.8	1	24.2	12	118.3	58	205.3
7	58.6	30	1.8	1	25.4	12	114.5	57	200.3
8	57.0	34	2.4	1	18.8	11	88.8	53	167.0
9	56.2	32	3.1	2	39.1	23	72.3	43	170.7
10	36.3	19	6.4	3	26.1	14	117.7	63	186.5
11	62.3	29	2.6	1	26.5	12	120.8	57	212.2
12	57.0	31	2.9	2	26.7	14	93.6	53	180.1
13	72.8	38	1.1	1	50.9	26	68.8	35	192.5
14	68.5	32	2.8	1	71.5	32	76.3	35	219.1
15	52.7	29	1.2	1	59.1	33	66.6	37	179.6
16	66.9	31	2.3	1	83.1	38	61.7	30	214.1
17	62.1	26	2.4	1	85.8	36	88.7	37	239.0
18	81.4	26	2.9	1	134.2	42	99.1	31	317.6

上表の如く完全莢歩合はB群及びC群が高くA群が低い。未熟莢數はB群最も少なくA群、C群は多い。尙地下に侵入し得ない子房柄の割合がA群及びB群に

〔Ⅱ〕粒の大小

品種番號	莢		子實		莢1升		子實1升	
	長cm	巾cm	長cm	巾cm	重量g	個數	重量g	個數
1	4.4	1.7	2.3	0.9	285	190	1,130	1,280
2	4.0	1.7	—	—	285	240	—	—
3	4.1	1.8	2.2	1.0	300	220	—	—
4	3.8	1.6	2.0	1.0	286	220	1,110	1,465
5	3.9	1.7	2.2	1.1	462	240	1,123	1,215
6	3.0	1.4	1.5	0.9	490	230	1,165	2,560
7	2.8	1.3	1.5	0.9	430	530	—	—
8	2.5	1.4	1.2	0.9	610	710	1,230	2,470
9	3.3	1.5	1.7	1.0	510	330	1,243	1,893
10	3.7	1.5	1.6	0.9	375	410	1,283	2,675
11	2.2	1.2	1.4	0.9	685	930	1,255	3,400
12	3.1	1.5	1.7	1.0	515	410	1,260	2,200
13	3.1	1.4	1.8	1.0	500	380	1,175	2,020
14	4.9	1.7	2.2	1.1	425	230	1,103	1,195
15	4.6	2.0	2.4	1.1	480	200	1,198	1,120
16	4.5	1.9	2.4	1.1	360	160	1,110	1,043
17	4.0	1.8	2.1	1.1	455	220	1,105	1,195
18	4.2	1.7	2.1	1.0	425	230	1,113	1,190

多いのは其の草型上當然の事であらう。開花が下から順次行はれるので早く開花したものは過熟になり、或は其の他の原因により腐敗するのであらうが之れがA群に特に多い傾向が見られる。

粒の大小に就ても品種間及び群間に差異がみとめられる。即ちA群及びC群は大へ中粒にしてB群は概して小粒である。而してB群が子實の充實がよく1升重(莢付)も重くC群これにつきA群が最も軽い。莢付の單位重は子實の充實及び空莢歩合に左右されるのであるが、空莢歩合の調査を缺ぐがA群に之れが多い事が觀察された。

〔Ⅳ〕耐旱性

耐旱性に關する文献は見當らないが昭和22年が異狀の旱魃であつたので、比較的順調に經過した昭和23年の結實状態と比較すると大體の傾向がうかがはれると思ふ。下表に依つてみると旱魃の年には開花して子房柄を伸張せしめた總數は何れも増加するが、完全莢數及び未熟莢數は何れも減少するが、腐敗莢數及び地中に侵入し得ない子房柄數は著しく増加する。

品種番號	昭和22年(旱魃)が昭和23年(順調)に對する割合				
	完全莢數	腐敗莢數	未熟莢數	子房柄數	計
1	16	420	58	260	165
2	38	197	41	125	148
3	48	219	49	340	170
4	31	241	36	222	125
5	—	—	—	—	—
6	43	522	78	232	150
7	101	72	63	188	144
8	65	195	100	310	197
9	—	—	—	—	—
10	60	58	64	114	99
11	79	0	85	139	113
12	69	114	60	162	118
13	52	755	46	420	184
14	46	677	27	496	175
15	20	2,100	16	432	186
16	17	470	29	340	119
17	39	530	28	340	154
18	39	1,175	72	342	193

A群は耐旱性最も弱きものの如く完全莢數の減少甚しく腐敗莢數を増加する。B群は耐旱性最も高く完全莢數の減少歩合少なく、腐敗莢數も少なく、未熟莢數も減少率が低い。C群は大體A群に類似するが地中に侵入し得ない子房柄數を著しく増加する。澁谷氏に依れ

---

ば子房柄が地中に侵入し結實するためには暗黒と水分が必要であるが、水分の要求量に依り耐旱性に差異を生ずるものと思ふ。

### 摘 要

落花生の品種は栽培上は草型に依り3群に分けることが適當と思はれ、この3群の間には他の形質に就ても明かに區別される。

2. 即ちB群は早生で粒は小～中粒、A、C群は晩生で粒は大～中粒であり、黒澁病に對する耐病性はB群が最も低い。
  3. 耐旱性はB群が最も強くC群これにつきA群が最も弱い。尙本調査に對しては試験地主任原田技官の助言を賜はり、且つ終始實際の調査には平田、上門兩氏をわづらはした事を附記して感謝の意を表す。
-